

兵庫県政 150 周年記念式典

日時 平成 30 年 7 月 12 日 (木)

場所 神戸国際会館 こくさいホール

(司会) 続きまして、兵庫県政 150 周年記念の講演をお聞きいただきます。講演いただきますのは、兵庫県立大学理事長、五百旗頭真さんです。五百旗頭理事長は、神戸大学法学部教授、防衛大学校長などを務められた後、本年 4 月から現職にご就任されました。この間、東日本大震災復興構想や、くまもと復旧・復興有識者会議の議長などを歴任されました。

本日の演題は「近代日本と兵庫の 150 年」です。それでは、五百旗頭理事長、よろしく願いいたします (拍手)。

講演「近代日本と兵庫の 150 年」

五百旗頭 真 氏 (兵庫県立大学理事長)

1. はじめに

皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた五百旗頭です。音楽というのは本当にいいですね。佐渡さんが西宮の芸文センターで、こういうふうにやったださる。そして、私は東日本大震災の復興構想会議の議長をした関係で東北へも度々行きますが、その地の方がほっと明るい表情をして、「佐渡裕さんがスーパーキッズオーケストラを連れて、ここへ来てくださったのですよ」と、東北の皆さんが本当にうれしそうにされるのです。と、思っていたら、熊本地震が起きますと、その地も佐渡さんは心にかけて下さいます。私は熊本県立大学の理事長をしていて、阪神・淡路大震災で被災者になり、東日本大震災に関わり、熊本へ行ったら熊本でも地震が起きるといので、地震男だと言われていました。ようやくその任を終えて兵庫へ帰ったら、先月、大阪北部地震が起こったので、「おまえが連れて回って、地震をあちこちに起こしている」と言われたりするのですが、それはともかく被災地にとって、日本中至るところで、佐渡さんの音楽がどんなに心を励ましてくださるか、うれしく思います。

大阪の北部地震、そして、このたびの西日本の集中豪雨と大地や気象の異変が続いています。それについても、災害ごとに、兵庫県が井戸知事の下で活発に関西広域連合という大きな枠組みの中で支援の先頭に立ち、私どものシンクタンクの人と防災未来センターが専門的知識を持って支援に行くのが繰り返されています。高槻市役所で、どう対策本部を立ち上げたらいいかということについて、人防のスタッフが張り付いて協力をするということが行われているのを見るにつけ、兵庫県の生き方、阪神・淡路大震災という大きな災害を受けて立ち上ったことの意義を改めて感じます。そのことは後でお話しますように、この地に厳しい試練であった。地獄の奈落にたたき込まれるような面があった。しかし、その中から災害から人々を支える大変意味のある活動をしてきたなど改めて思います。またネパールでも、少し前にはスマトラでも、トルコでも、台湾でも、減災・復興をテーマにする専門家が協力するというのは、兵庫県の非常に大きな意味のある活動だと改めて思います。

私は井戸知事から、兵庫県 150 年史の編纂委員長を仰せつかりました。新野先生と石原信雄さんが顧問で、数十名の識者、専門家が集まって、この 150 年史をこれから 3 年ぐらいかけて研究し、2022 年、あるいは 2023 年あたりに 150 年史が出版されることになると思います。とはいえ、100 年史は、ちょうど明治 100 年 (1967 年) に出版されております。従って、その後の 50 年について私どもが書く。これから同じぐらいの分厚さのものを書こうとしているところです。今日は、そのような役割を仰せつかった者として、「近代日本と兵庫の 150 年」というお話をしようかと思ったのですが、受けたときの想定では、私は 1 時間半か 2 時間ぐらいつ話すのかなと思って、そういう表題を言ったわけです。が、プログラムを見ますと 45 分となって

おります。従って、近代日本の話をやり出すときがありませんので、兵庫の 150 年に絞り、かつ最初の 100 年というよりは、この 50 年の兵庫にフォーカスしてお話しさせていただきたいと思います。

2. 兵庫の成り立ち

兵庫県の成り立ちについて、今日頂いておりますパンフレットの表紙にある五国の地図を見ていただくとよく分かります。江戸時代に藩は 275 以上あったわけですが、今兵庫県になっているところは 21 に加えて、幕府直轄領や旗本領、あるいは別の藩の飛び地などたくさんあって、それが一つの大きな兵庫県になっているわけです。その中で、但馬、播磨という左側にどんとある大きな国。これも徳川時代は一つではなくて、それぞれたくさんの藩に分かれていて、姫路城を持っている姫路藩は、兵庫県になったものの中で一番大きな藩ですが、それでも 15 万石でしかないのです。播磨全体を一つの藩としていけば、50 万石、70 万石、それ以上になったかもしれません。しかし、地域としてまとまりがあり、伝統を持っているのが、この但馬、播磨です。その下に淡路。これは徳島県から明治の初期に移されたものです。それまで徳島県、当時名東県の一部だったものが兵庫県の方に移された。これもある種まとまりのある地域です。

それに対して、丹波は京都府と分けられた。摂津も大阪府と分けられることになったわけです。この摂津というのが大変独特で重要な地でありまして、津というのは、難波の津、大阪湾のことです。それを覆うような地域が摂津なのです。この摂津という大阪湾を擁する地域は、めちゃくちゃ重要な地なのです。そのことは、信長に抵抗した石山本願寺が、どれほどしぶとくあの信長に抵抗を続けたか。それを攻めた秀吉が、その後、その地に大阪城を造ったわけです。ここを押さえれば天下は治められる。その後、秀吉に東の国に流された徳川家康が、それを不遇と考えずに、無傷の原始林の広がる関東というのは素晴らしい資源だと開き直って、そこを今に至るまでの都にしたわけです。そうなりますと、秀吉のように自分が摂津の中心に大阪城を持って支配するにはいいです。けれども、江戸に本拠があって、この摂津の地を誰かにまとめて与えるというのは、あまりにも危険なのです。重要過ぎるのです。陸上交通だけではなく、瀬戸内を通過して国外へ行き来する。ものすごく重要です。従って、ここはあまり大きな藩は置けない。小さく切り刻んで、誰かが強大になり過ぎないようにという配慮の下で、ものすごくたくさんの切り刻みをやっているのです。その切り刻まれていたものが、明治以後の大阪府と兵庫県に合わせられていきます。

安定した但馬、播磨、淡路という地に対して、摂津という、重要過ぎるゆえに切り刻まれたものを再統合する形で、そして、大阪城のあったところが中心であるとともに、摂津のもう一つの焦点は兵庫港であり神戸港である。これについて、少しお話ししたいと思います。あまり話をすると 45 分が過ぎますので、神戸という宿命の地はできるだけ簡潔に話をしたいと思います。

3. 国内の結節点 神戸

慶応 4 年（1867）に兵庫開港。このときの幕府と朝廷との間のすったもんだや、尊王攘夷派と開国派との間の歴史については、皆さん、おなじみです。開港した後、非常に重要なことは、生田川の付け替えをしたことです。神戸が良港であるのは、水深の深い港であって、大阪のように川がすぐ土砂で浅くなってしまう。それを確かにしたのが生田川の付け替えです。元々、生田川は新神戸のフラワーロード、市役所の前を流れていておりました。その川を今の生田川の方へ付け替えて、ここを南北に貫く幹線道路にし、かつ、その周りの三宮の市街地を整備した。これをやったのが紀州出身の加納宗七という人で、今、加納町三丁目という名前にその名が残っております。これが三宮を中心とする神戸の発展の土台になったわけです。土砂で埋もれない、大型船の入る良港というのが、これによって保障された。

外国航路は明治の初めに開いたものを活用して、ほぼ外国船が支配しておりましたが、乱暴者というか、志の強い、野人の風のある三菱の岩崎弥太郎がそれに挑戦しまして、神戸から上海への航路をつくって対抗する。横浜、神戸、上海という航路を開いたのが明治 8 年です。そして、やがて外国の船会社を圧倒して、

神戸を日本主導の国際貿易港へと道を開いていきます。

そういう世界の玄関口であるということとともに、あまり言われなくてもいいけれど非常に大事なのは、神戸が国内における結節点にもなったということです。多分に偶然と思われる要素があるのですが、交流人口がこの地を覆うという状況ができた。「汽笛一声新橋を」と歌われる、新橋・横浜に鉄道が最初に通ったことは小学生でも知っている。しかし同時に、神戸・大阪も並行的に手がけて、少し遅れてできるので。神戸・大阪の鉄道が通ったのが明治7年です。さらに東海道を広げていこうというので、大阪から京都までもできて、京都・神戸間が開通したのが明治10年です。その明治10年のときに、ご承知の西南戦争が起きます。そのうち大河ドラマ「西郷どん」の最終幕では話が行くのだと思います。そうしますと、京都、大阪という中心的な日本の重要地点から神戸まで鉄道で来て、そこから船に乗って九州での戦いに向かうというので、神戸港というのは運命的な重要性を持つことになったわけです。鉄道との結節点ということにおいて神戸の地は非常に重要になります。

さらに、その後、明治22年には東海道が全線開通します。新橋から神戸まで鉄道が開通した。そして、続けて神戸から西へ、山陽鉄道が広げられていきます。岡山から広島は山の中で大変なのですが、頑張って明治27年には広島まで通じた。その瞬間に日清戦争が起こったのです。全国から東海道、山陽道線を使って広島まで来たのが、宇品港（広島港）から大陸に出征していくという形になった。そういうことができたと同時に、神戸からも別途、重いものを運ぶなどということが行われて、神戸は運命的に、国内と対外活動を連結する重要地点になった。鉄道における国内の結節点であるとともに国際港である、世界の玄関口であるということで、運命的なタイミングもあって、神戸は、いやが応でも交流人口でにぎわう重要地として発展していくことになった。

そういう神戸港がありますと、先ほどの来賓ごあいさつの中でありましたように、この地では灘の酒が非常に伝統のある産業です。明治になりますとマッチが、今では若い人は「そんなもの」と思うかもしれませんが、非常に重要な産業として、この神戸の地の中心的な産品にもなったことがあります。しかし、そのように神戸港が重要な結節点であるということから、その両側の海、大阪湾の方向にも、それ以上に播磨に向かって臨海工業地帯が広がっていきます。神戸港がありますから、造船業、鉄鋼が要る、機械が要るということで、重工業の中軸として近代日本をリードすることになった。途中は省きますが、戦争、敗戦、復興という中で、改めて兵庫県の臨海工業地帯の重工業が日本を引っ張って、引き上げていったということをこれから見たいと思います。

そういう産業面、工業面の大きな役割とは別に、やはり忘れてはいけないのは、世界の玄関口であるおかげで、戦争中もフロインドリブは頑張ってクッキーを作ったとか、戦前からおいしいケーキは神戸にあればある。お菓子、パン、そして西欧料理、中華料理という食文化もリードする神戸である。さらに、甲子園。タイガースファンというよりは高校野球のメッカとして全国的意味を持つ役割を果たしています。また、小林一三さんが宝塚歌劇をつくられたというので、文化・スポーツの面でも注目すべき役割を果たしてきた兵庫ということが言えるかと思えます。

大ざっぱにこのような開港から100年間の流れを話しました上で、お手元に細かい字で、暗い中では、老眼の方は最近はやりのメガネでも持ってこなければ見にくいかもしれませんが、これを見ながら聞いていただけたらと思います。

4. 日本と兵庫の GDP

これは150年史編纂を仰せつかった、ひょうご震災記念21世紀研究機構のスタッフの白井さんたちが、私の注文を受けながら作ってくれたグラフです。左端から斜めにずっと上がって右へ流れている線がありますが、この折れ線グラフが重要です。ページの左側については、1960年代に始まって、1970年代、1980年代と、1990年ごろまで右肩上がりです。日本のGDPが上がっていった時代です。日本全体のGDPが赤の点々

です。それに対して、それに寄り添うようにずっと進んでいる青い実線が兵庫の GDP です。いずれも 1967 年を起点 100 として伸びていく姿を示したものです。この伸びていく中で、先ほども埼玉県の上田知事会会長のごあいさつにもありましたが、1960 年代の後ろの方、1968 年には日本の GDP は世界で第 2 位になった。ヨーロッパ諸国をごぼう抜きのように抜いて、アメリカの次までになった。経済国家日本です。兵庫県は、それに沿って上がっていつている。というか、むしろ日本の工業化を牽引しているのです。そういう姿がこのグラフに示されております。

ただし、右の方へ行くと話は違ってしまっていて、1992 年、1993 年から右肩上がりではなくて横向きに変わります。これはバブルがはじけて、日本経済はそれ以後、「失われた 10 年」、「失われた 20 年」というふうになる変化です。そしてその後、赤い大きな線で中央を上下しているのが、阪神・淡路大震災の瞬間です。それ以後、日本の GDP は横ばい。日本の場合は阪神・淡路大震災が要因というよりは、バブルがはじけて日本経済が苦境に陥ったということで横ばい。兵庫の GDP は横ばいを維持することもできず、一時的に復興需要で全国よりも上に青い線が上がっている瞬間がありますが、一段落すると全国を下回って非常に苦しい事態に陥っているということが示されております。右半分はそういうことです。それに加えて 2008 年にリーマンショックが起こりまして、世界不況の中で、日本経済はさらに厳しい事態になり、2008 年頃から赤も青もどちらも下がっている。これはリーマンショックによる世界不況の影響です。そして、日本について言うならば、少子高齢化構造というのがあって、力強く上昇するというよりは、その地位を守るのも難しい。このように、この 50 年を大きく見て、右肩上がりの 1990 年ごろまでと、大震災の後の苦闘する時代という二つに分かれると言えます。

全体の姿がそうだとすると、兵庫県の全国的な位置はどうかということが、やはり関心です。それについて見ますと、左の方、1970 年の赤線の下の方に全国シェアランキングというものが付いています。それで見ると、日本は三極構造になっている。東京、大阪、愛知（名古屋）の三つが 17%、10%、7%という GDP のシェアを誇って、3 軸構造である。そして、東京には神奈川が寄り添うわけですから。そして大阪には兵庫が寄り添う。その両者が 4 位、5 位であるということを見て取ることができます。かなりその辺がはっきりしているというのが、1960 年代の高度成長を遂げたときの状況です。

今度は一転して、右端の 2014 年の同じシェアランキングを見ていただきたいのですが、意外に変わっていない。東京、大阪、愛知という 3 強。ただ、東京に寄り添って神奈川、埼玉、千葉の三つが一緒に引きずり上げられて、兵庫が埼玉・千葉に抜かれて 7 位に下がった。阪神・淡路大震災の後、復興需要と横書きの箱の中に書いてありますが、一時的に平成 15 年、平成 16 年（2003 年、2004 年）は第 8 位にまで落ちたことがあった。けれども、その後、何とか踏ん張って 6、7 位に定着しているところです。ただ、そういう構造で、フォロワーを広げた東京圏は、周りの三つの県を合わせますと 32%の GDP を占めるのです。大阪圏は兵庫と合わせて 15%ほどあったのが 12%あたりに下がってきている。一極集中ここに極まれます。日本全体の GDP の 3 分の 1 ぐらいを東京圏が占めているという姿が見えます。そんな中、兵庫は初めは 4.5%で 5 位。7 位に落ちたけれども 3.8%で踏みとどまっている。しかし、1 人当たりの所得という面で言うと 20 位ぐらいに落ちているということで、これは 150 年史を詳細に書くときに分析を加えたいと思っております。

では、兵庫県はどうして全国的に 5 位や 7 位なのか。ベストテンにずっと地位を占められるというのは大変なことです。何がそれを可能にしているか。一つは、先ほど言いました内外の結節点としての神戸。鉄道と国際港ということで、国内外の交流人口の要になっているということであり、それを基盤にして、左端の 1970 年の全国シェアの横に縦書きで書いてありますが、一つには、臨海工業地帯を神戸港から両岸に広げている。大阪湾だけでなく、播磨灘に重工業地帯を臨海工業地帯として展開している。そして、神戸株式会社ともいわれましたが、山を削って住宅街を造り、海を埋めて、ポートアイランドや六甲アイランドなどの人口島を造る。臨海工場ではなくて、まちを造るという大変独創的な努力を神戸市は行った。そして、そうした工業地帯や商店になるところをバックアップする阪神間、裏六甲、人工島等々を合わせた巨大な近郊住

宅街を造り上げた。そういうことで、震災後の苦しい中でもなお4%近いGDPを持ち、7位という地位を保っているわけです。

ただ、その交流人口の伸びをさらに進めることを困難にした要因として想起されることは、関空（関西国際空港）を造るという話ができたとときに、最初に神戸市に相談があつて、それを拒否したことです。もしそれを受け入れていれば、国内結節点であり、国際貿易港ということに加え、空の時代もまた神戸港から結節点として交流人口があふれる時代になっていたと思うのです。しかし、騒音公害や環境問題が重視される時代に市長選挙を迎えて、関空を神戸沖に造ることを拒否した。これによって、さらに神戸の交流人口が膨らむということは困難になったと思います。

5. 兵庫県政 50 年の出来事

さて、そのように大きな輪郭を申し上げた上で、兵庫県 50 年の時代区分の前半と後半という二つから、起承転結の四つに整理して少し踏み込みたいと思います。前半を二つ、後半を二つに分けたいと思います。

1960 年代から 1970 年代にかけて、高度成長の時代、兵庫は日本の牽引車であったということを申しましたが、この表を見て、おやっと思うのは、1970 年代になりますと石油危機が再度起こりまして、ニクソンショックもあったし、アジアの反日暴動もあったし、危機の 70 年代というイメージでわれわれは理解しているのです。ところが、実は右肩上がりはいささかも落ちていない。危機があつても技術革新によって工業製品の国際競争力を高めて、1970 年代も伸び続けている。そして兵庫県はそれを牽引しているということが分かります。プロジェクトとしても、グラフの下の方に、新幹線が開通した、市営地下鉄が開通した、ポートアイランドができた、中国自動車道が通ったというふうに、右肩上がり時代らしい事象が並んでおります。

そういう中で、兵庫県の歴代知事および県政としては、どういうことをやろうとしたのか。1967 年に出た兵庫の 100 年史の場合には、個々の知事がどういう方針であつたかという視点はほとんど書かれていません。遠慮しているのか、調べきれなかったのか。伊藤博文の名前は割とよく出るのですが、どう考えて何をしようとしたかということは、あまりよく分からなかったのかもしれない。が、近年になるとそれがよく分かります。ここの図の一番下に、金井知事に始まって現在の井戸知事まで、その在位期間と取った方針のポイントが書いてあります。歴代兵庫県知事は「GDP 万歳」では全くなかった。むしろそのひずみへの対処を非常に重視した。金井知事のときからそうです。ローマクラブの「成長の限界」というものを県の文書で引用していることもあります。「くたばれ GDP」という言葉すら出てきたりします。1971 年の縦書きのところで、公害防止条例強化とあります。それ以前にも条例はあつたのですが、さらに力を入れる。この地は産業化が非常に進んだだけに、60 年代末には、阪神間の電車で南風のとき、窓を開けていると臭うというような面もありました。そういう工業化の問題を実感する地域だけに、それに対する対処を先んじてやったという面があると思います。金井知事は、「新しい生活文化」あるいは「緑の回廊」ということを提案された。そのころ新野先生は、そうした方向についての提言に関与されたと伺っております。

それから消費者保護。1980 年の赤い縦線の左の方に、生活文化部、保健環境部、都市住宅部を県庁の中に置いたとあります。これが、県民生活の内容充実を重視したいという兵庫県政の姿勢をよく示していると思います。

1960 年代、1970 年代を超えて、1980 年代。これは起承転結の承に当たるわけですが、基本的に同じく伸びていきます。つまり、1980 年代は日本史で言えば、経済国家としての頂点に向かう年です。冷戦終結のとき、日本の GDP は、アメリカの 25% に次いで、世界の 15% を占有するという、すさまじい経済大国になっていたのです。そうなる日本であつたのですが、その日本全体の流れに対して兵庫県は乗り切れなかった面があります。ご承知のように、1985 年のプラザ合意で円高誘導が行われまして、竹下大蔵大臣がアメリカ政府と合意し、円高を強行することになりました。どんなにいろいろな努力をしても、日本の対米貿易黒

字が続く。現地生産、直接投資をやっても、輸入の努力をしても、日本の産業競争力は強過ぎて、アメリカの対日赤字は減らないのです。今、トランプ大統領が中国に対してかっかしている。あれが当時は日本に対してあったわけです。この上は、ゴルフではないけれども、大きくハンディを変える他はないということで円高誘導の合意をし、その結果、日本全体は苦勞しました。特に兵庫県は重厚長大の輸出工業製品の拠点ですから、円高の影響をもろに受けて輸出困難になり、とりわけ大きな打撃を受けた。ご覧のように、1980年代、1984年ぐらいまでは全国の右肩上りと相い伍していきますが、突然、横線が青だけ折れます。全国と大きくかい離する。そのギャップは何かといえは今申し上げた事情で、それに対して、下の方に黄色を塗って書いておりますが、県は特定不況地域振興条例で支えよう、痛みを和らげようという努力をしました。

そして、もっと長期的な兵庫県らしい努力として注目したいのが、科学技術立県です。科学技術の進展に伴い、産業経済は姿を変えていく。その中で兵庫県は、それを後追いするのではなくて、先頭を切って科学技術を極め、打ち出していこうという努力をした。その特定不況地域の左側に「科学技術会議設立」。さらに右の方に行きましても、同じような科学技術関係の「ひょうご科学技術協会成立」というふうに、何とか先端技術をわがものにするによって、円高不況で受太刀に回り苦しくなったところを取り戻そうという努力をした。これは非常に立派な対応だと私は思います。

そして3番目に、そのように産業面で後れを取らない努力をしながら、それ以上に、金井知事、坂井知事、貝原知事の時代になるわけですが、兵庫県の伝統である環境を大事にし、心豊かな兵庫。そして、先ほどの佐渡裕さんが頑張ってくださいている芸術・文化の面に力を入れる。それから、小学校の5年生に自然学校という体験をさせて、豊かな自然を自分の心の中に取り入れる。少し後になります。酒鬼薔薇事件という、須磨での大変衝撃的な事件があった。その後、中学2年生にトライアルウィークといって、社会経験を持たせる実地体験指導のようなことを、全国でも兵庫県が先導して展開している。そういうことで、教育、福祉、さらに芸術・文化に力を入れるということをやっと続けているのです。不況になったからやめるというものではなくて、根の深い、そして知事の交代にもかかわらず続けられている。そうしたもろもろの努力があって、驚くべきことですが、円高不況を超えて、また1990年のころに全国の赤点線に近づいています。よく頑張ったのだと思います。

そういうことで、やっと軌道に乗ったかなと思ったところでバブル経済が崩れた。それは全国も県も同じように打撃を受けたのですが、そこに1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災が来て、運命的な事態となるわけです。そこから起承転結の転、第3期です。奈落の底に突き落とされる感の深い大震災を、年配の方は昨日の事のご記憶だと思います。

そういう大災害の中にいますと、平常に戻すだけ、つまり復旧だけでも困難なのです。どんなに頑張っても簡単に元に戻らないと、「どうしてくれるんだ。われわれにこんなつれない対応でいいのか」と被災者に叱られるようなことが当分続くわけです。そういうことを考えますと、復旧もできない事態の中で「創造的復興」などというのは、夢想家のたわ言ではないかと考えられる。これは本当にそうなのです。熊本でもそうなのです。熊本は、阪神・淡路ほどではなくて、50人ということで地震そのものによる犠牲は限られておりました。地震エネルギーは、阪神・淡路より大きく繰り返し起こりましたが、どちらかという地震が山林の方に向かいましたので、限られた犠牲者で済んだ。そのときに、みんなどうやって人命救助するのか。避難所を開いたけれども食料が来ないではないかということで、夢中になるわけです。本震の2日後に蒲島知事が古い友人である私のところに電話してきて、「あなたは阪神・淡路も東日本の経験もあるから、熊本の復旧・復興有識者会議の座長になってリードしてくれ」と。きっとそういうふうに出てくるだろうと思っていたので、「分かった。喜んでやるよ」と即答したのです。ところが蒲島知事は、ある意味で部下からブーイングを受けるのです。「知事、何を言っているのですか。今はそういうときではないでしょう。命の問題、食べ物の問題というときに、将来の創造的復興だと。何を言っているのですか」という反応を受けたということ、今になって、部下とともに笑って言っておりますけれども、そういうのが実状なのです。

従って、創造的復興なんて考えることもできないというのが普通なのですが、しかし、それでも創造的復興がまれに行われる。それには二つの条件があると思います。

一つは、大災害が起こる前から構想があったということです。「わが県の将来はこうしたい」という構想があった場合だけ、悲惨の中でも、その目標を高く持って旗を掲げることが可能になります。当時の下河辺淳復興委員長が東京からやってきて、フェニックス会議で言っていましたが、全国の県の中でも兵庫県が一番、将来構想の好きな県だ。いろいろなことについて検討している。それを復興という大きな看板の下で全部生かしたらどうかと。後藤新平も帝都復興の大風呂敷を広げたくれども、それは地震が起こってから作ったのではない。ずっと前から東京を何とかしたいというのがあって、東京市長としてもできなかった。みんな「びた一文地面を動かしてくれるな」という中でできなかったものを、地震が起こったところで、この機会を利用して、災いを福に転じようという掛け声の下で、かねてあったビジョンをどんと出すことができたのです。今、全国で兵庫県ほどビジョンを持っているところはない、それをしっかりと出しなさいと下河辺さんは励ましてくれたのです。そういう大きなビジョン構想が元々あるということが一つです。

もう一つは、強い意思を持つリーダーシップがあるということです。「何を言っているのですか。今は命が懸かっているのですよ。そんなことにお金を使うのですか」と言ったら、「芸術文化センターだ、HAT 神戸のシンクタンクだ、ミュージアムだ、国際機関だ、そんな不要不急のこと」と言いかねないわけです。それを「この地にとっても、県にとっても、世界にとっても大事なんだ」という強い信念を持ったリーダーシップがあった場合にだけできると言えると思います。

そういうわけで、兵庫では HAT 神戸に新都心、減災のシンクタンク、国際機関などを集めることができましたし、こころのケアセンターという、今ではすっかり日本社会に場を得ましたが、当時は「何それ？」という感が否めなかったものもできた。それから、HAT 神戸に県立美術館を造った。淡路島には園芸学校も造った。それから安藤忠雄さんの手による淡路の夢舞台。人と自然の共生の場。あの醜い土取り跡を共生の場にするということと同時に、日本と世界を結ぶ国際シンポジウム・淡路会議というものが開かれております。そういう共生の場とする。また市民の憩いの場にする。あんなところにウェスティンホテルなどを造って、すぐ倒産するのではないかという声もありましたが、今に至るまで予約が難しいほど盛況で、この地の人は、あれを非常に大事な資産としているわけです。それから、佐渡裕さんが頑張ってくださっている西宮北口の芸術文化センター。音楽や劇、心豊かな神戸。被災地に潤いや、かぐわしさをもたらすことの大事さを知る。大変な時代の中で、こういうことを頑張るというのは、勇気ある対処です。

減災という概念は、人防の頑張りがあって、今では日本社会の常識となりました。全国から頂いた支援、世界から頂いた支援を思うだけに、今度は全国を、世界を支えたいというシンクタンクやミュージアムの努力。ある意味では亡くなった方の分まで頑張ろうという不屈の精神であり、鎮魂の思いであり、社会の良心でもある。そうした、震災の前には全くなかった創造的復興の成果をこの地は持っている。

ただ、それは立派なことだ、勇気あることだとは申しませんが、正直に言って、財政赤字の山というのは避けられなかったわけです。今なら、これはもう少し楽です。兵庫県は復興を巡る借金を最大で 1 兆 300 億円ほど抱えていました。兵庫ですらそうであるなら、東北の小さな自治体が、「国が 4 分の 3 持ってくれるから、残り 4 分 1 だけ地元でね」とか、「激甚災害を 90%までやってもらって、残り 5%、10%だからね」といっても、それを積み上げていったら被災自治体は生きていけなくなる。兵庫だから頑張れるけれども、東北の自治体ではできないというので、私は復興構想会議の議長として、事務局をやっているお役人に対して、「今度は 90~95%まで見てやってくださいよ」とお願いしました。「そんなことは軽々に答えられません」と言っていましたが、秋になって、恐らく復興税で与野党合意ができたあたりだったと思うのですが、「ご報告があります。今度は東日本大震災については、全て 100%国費で見ます」と言ったので、私はびっくりして、「100%？ それはモラルハザードを起こしませんか。ほんのちょっとでも地元負担を残した方がいいのではないですか」と言ったら、「いえいえ、もう覚悟しましたので」と言うのです。

覚悟したらいいというものでもないと思うのですが、今度は負担ゼロという大変な頑張り方をした。このため、防潮堤の要らないところまでそのまま造ってしまうとか、高台移転大工事を必要以上にやりかねないという面が出てきた。熊本地震がいいバランスになったと思います。例えば熊本のがれき処理は100%ではなく、99.75%まで国が見てくれているので、いろいろ手当をした残り0.25%だけ。でも、0.25%でも地元にとってはばかにならない。その負担があるということで、非常に責任感を持ってまじめにやるのです。

そのような振幅の歴史がありますが、地震頻発の最初のケースであった兵庫の場合には、東日本とは対極的に、国が4分の3を持つといえ、地元兵庫が残りの4分の1を引き受けた。国が90%まで持つと言われたら、ありがたく、残りの10%を勇気を持って受けとめたでしょう。その結果、今でもなお3600億円ほどの赤字の山が残っている。そういう中で、震災から5年たったところで淡路の花博というものをやって、皆さんへの感謝の思いを込めて、「復興していますよ」ということをアピールしながら、そのころ、表で見ていただけると分かるように、行財政改革を提起せざるを得なくなってきたわけです。この借金の山を積み重ねていったらどうなるか。2005年の縦の赤線がありますが、その途中に震災関連公債費とあって、2005年は1216億円をさらに積み増ししているのです。ところが2006年には706億円と。この調子でやっていたのでは、とてもではないがいけない。この年に、震災で支援いただいたことへのお礼の気持ちを表すのだということで、のじぎく国体をやりながら、しかし、お金をかけての大事業というのはぐっと締めるというふうに、その後、行財政構造改革推進条例を作って、県庁の人員、給与の3割カットを行います。これは県庁の皆さん、上から下まで大変苦労されたと思います。兵庫県庁は人材が優れているという評判だったのですが、給与カットにも耐えて頑張られた。しかし、それを永遠にやっていたはいけない。平成30年を目標にして、かなり目的を達したという中で、今ではそれを解除していき、やはり人材を大事にし、遇するということがまた必要だという線に立ち返っています。

いずれにしても、10年懸命にやった、創造的復興に勇気を持って立ち向かった。その後はお金を使い過ぎないように、むしろ財政再建を重視しながら。そうなったからといって事業がなくなったのではなくて、むしろ結果が出ています。人防と心のケアセンターはその10年のうちですが、21世紀研究機構はその後の第4期ですし、関西広域連合をつくったりした。そして東日本大震災が起こりますと、井戸知事のリーダーシップの下でカウンターパート方式での支援を行い、全国をリードしました。今は熊本地震に対する政府のプッシュ型が大変評判になっているが、実は関西広域連合が東日本の被災地に対して始めた。何が欲しいのかというのを聞くな。忙しいときに「何が欲しいか言え」と言われるだけで大変だと。そうではなくて、最初の1週間は何が要るか、2週間目は何が要るようになるかということは我々自身の経験でおおよそ分かる。多少間違えてもいいから、必要と思われるものをこちらの方から見繕って送る。さらに人を送り込んで、その人の報告を聞いて修正していけばいいというふうに、プッシュ型を始めたのが東日本大震災のときの関西広域連合でした。

このように、ある意味、財政再建をやって、平常への復帰を図りながら、全国の減災のため支援を続ける。地域創生、21世紀の兵庫をどうつくっていくかということに改めて立ち向かっていくという時期を迎えているのが、起承転結の結のところでは。

まとめ

まとめて言いますと、参画と共生です。井戸県政の強調された点でもありますが、それは兵庫県が歴代重視してきた姿勢です。県民の生活重視で、温かい優しさを失わない県政ということが続いて大事にされておりますし、科学技術立県ということで、1996年には西播磨にSPRING-8ができて、そこに兵庫県立大学の理学部もつくられる。2012年にはスーパーコンピュータ「京」がポートアイランドにできて、多くの企業がそれに加わる。さらに県立大学は今年、社会情報科学部という、AIを社会に生かすための新学部をつくる。さらに国際商経学部の中にはグローバルビジネスコースということで、外国人30人を留学させて、新しく

造る国際学生寮の中で日本人 80 人と一緒に住まわせて、英語で生活し、国際人材をつくるということをやっている。財政再建が大変な中で、よく頑張るなと思います。科学技術立県、先を見据えての努力を重ねる。何よりも安全・安心を大事にする兵庫です。東日本でも熊本でも、あるいは国外でも、どこで地震が起こっても支援に出かけていく。そのように苦境を耐えながら県民生活、そして全国と世界を災害面で支えようとしている兵庫。そういうことができるのも、5 位から 7 位に下がったとは言いながら、兵庫県の GDP がベスト 10 の中にしっかりとあるというパイがあるからだということが言えると思います。

財政再建を進めながら、しかし AI の時代、ロボットの時代、環境と電気自動車の時代、また大きな産業構造の変化を前にして、「そういうことは、どうでもいいのです」とは言わずに、しっかりとその先端を見極めながら参画しリードしていく姿勢を持っている。かつて日本経済の右肩上がりを牽引した兵庫県でしたが、多様性の中のパワーを発揮して、力ある多様性の兵庫であることを今後も示していくことができればと、150 年史を振り返りながら思う次第です。

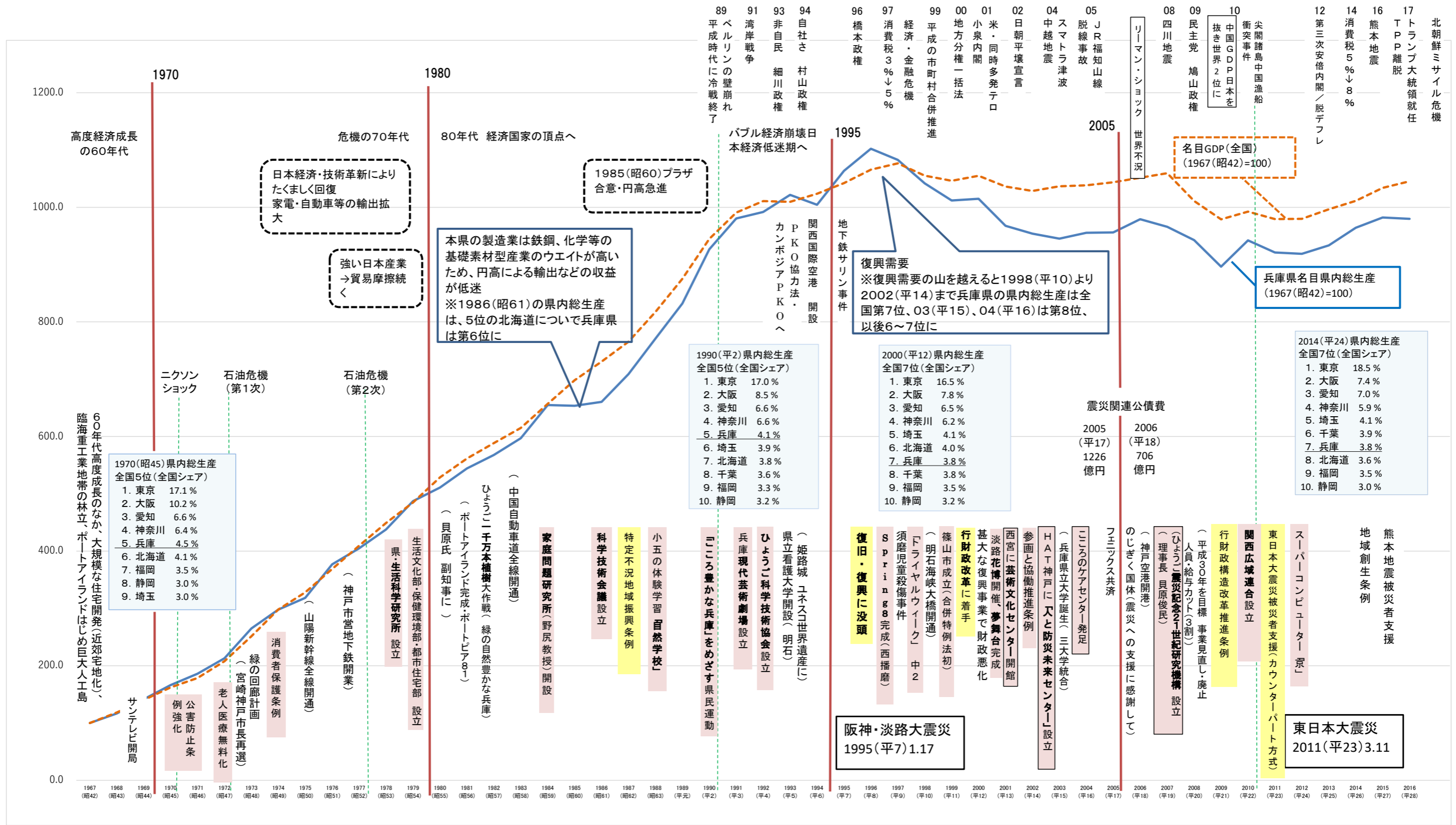
2～3 年のうちに 150 年史を書き上げることになりますので、皆さんも、「おっしゃっていたことは、ここは違うんじゃない？」とか、「もっとこういう点を強調すべきではないか」ということをぜひお寄せください。事務局がひょうご震災記念 21 世紀研究機構にありますし、県庁でも結構ですので、皆さんのご意見を集めて仕上げることであればうれしく思います。どうぞよろしくお願いします。

長い間ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（司会） ありがとうございました。「近代日本と兵庫の 150 年」を講演いただきました。兵庫県立大学理事長の五百旗頭真さんでした。ありがとうございました（拍手）。

兵庫50年のあゆみ 1967(昭42)～2018(平30)

I 高度経済成長とそのひずみへの対応	II 円高不況を超えて・生活文化重視のころ豊かな兵庫・科学技術立県	III 創造的復興へ全力投球 一大震災後10年の復興	IV 災後の時代と行財政構造改革—21世紀兵庫の創生を求めて
--------------------	-----------------------------------	----------------------------	--------------------------------



【兵庫県知事】

金井元彦	坂井時忠	貝原俊民	井戸敏三
1969(昭41)「県勢振興計画」 ※健康で文化的な県政生活の向上 ○ 調和のとれた社会開発 ○ 生活の科学化	1975(昭50)「21世紀への生活文化社会計画」 ※ 参加と合意と連帯の県政 ○ 教育・文化立県、健康・福祉立県、産業・雇用立県 ○ 生活文化豊かな希望社会 ○ 生活の文化化	1986(昭61)「兵庫2001年計画」 ※共生ネットワーク型社会の構築 ○ 生活創造 ○ 自由で調和のある自律社会	2001(平13)「21世紀兵庫長期ビジョン」 ※ 多様な地域に多彩な文化と豊かな暮らしを築く ○ 安全と安心、自律と共生 ○ 新しい「公」の創造
		○ 創造的復興 ○ 中央集権・官主導から地方分権・民自律へ ○ 人と自然、人と人、人と社会が共生する ○ 豊かな兵庫の実現 ○ 美しい兵庫	2011(平23)同(2040年に向けて) ※ 創造と共生の舞台・兵庫 ○ 県民の参画と協働 ○ 安全元氣ふるさと兵庫